



地球上すべての人びとに平和に生きる権利を

9条地球憲章の会 第46回 公開研究会

日本被団協所属

松本 正さんの講演

94歳のヒバクシャの決意 命ある限り原爆の語り部を

2025年

8月21日(木) 午後6時半～8時半

オンラインZOOMによる開催 参加費：1000円

参加申込みは、次のURLか、右のQRコードよりお願いします。

<https://forms.gle/SLapHqc9jbHqmC9dA>



松本 正 (まつもと ただし)

★プロフィール

1931年1月6日、広島県広島市の西大工町で生まれる。1945年8月6日、広島二中3年生(14歳)時、学徒動員先の三菱重工工場広島機械製作所(爆心地から約3.5km)で被爆する。奇跡的に無傷で助かるが身内10人を原爆で失う。戦後、時事通信社、ディスプレイ会社勤務を経て、「マツモト・デザイン」を設立。広島二中の二十二回生同期会「二二会」東京支部常任理事、在京芸陽観音同窓会会長、横浜市原爆被災者の会(浜友の会)事務局長を歴任。日本被団協所属。現在も原爆の語り部として活躍中。

★主な著作

『ピカで犠牲の声聞こゆ』(オフィスなかおか 2024年)

吾が命
能う限りは
続けたい
語り部を

講演要旨

あの日 — そう、昭和20(1945)年の8月6日、旧制県立広島第二中学校(広島二中、広島観音高等学校)の3年生だったわたしは、爆心地から4キロほど離れた南観音町にある三菱重工広島機械製作所へ学徒労働員(学徒動員)で通勤し、防空壕を掘っている最中に被爆しました。

奇跡的に無傷だったわたしは、人間とは思えない姿で助けを懇願する人たちを置き去りにして、広島市内から逃げ出しました。最期まで「兄が助けに来てくれる」と信じていた最愛の弟のもとへも駆けつけてやることができず、身内10人を原爆で失いました。

あのとき、誰一人助けてやることができなかった。
わたしは“ずるいヒバクシャ”です。

わたしはずっと自分には原爆を語る資格はないと証言を拒んできました。しかし、80歳を過ぎたころから、ようやく「語り部」としてあの日のことを話しはじめたのです。

わたしたち被爆者がなにより恐れるのは、「人類が原爆の恐ろしさを忘れる」こと。あの忌まわしい原爆の記憶の風化は、すなわち人類の滅亡を意味します。

あのときの悲惨な思い、苦しみを孫やひ孫の世代まで、いや、未来の世代に味わせたくありません。

いま、わたしは94歳。

でも、命あるかぎり被爆者の想いをこれからも伝えていきたい。
それが今生で果たすべきわたしの務めだと思っています。

連絡先 9条地球憲章の会事務局 9.globalpeace@gmail.com

HP <https://www.9peacecharter.org/>

FB <https://www.facebook.com/9peacecharter/>